

まち歩きで知る！ ちとせの景観

～人がつくり育むまちなか～



ちとせの景観 ～人がつくり育むまちなか～

【ポイント解説】

① 青葉公園・②千歳神社の鎮守の杜

【景観づくりの手法 「まもる」・「ととのえる」】

青葉公園とその周辺は、千歳神社の鎮守の杜、千歳川沿いの林、高速道路を挟んだ西側の林など、支笏湖に至るまで自然のままの姿を保つ林や人の手が生み出した林が続き、ひとつの大きな森になっています。自然のまま残った理由としてはこの公園の周辺は、昔、天皇家の財産の山林である御料林だったからです。そのため、公園内には、多くの種類の植物や野鳥、昆虫などが生息しています。この地域の豊かな自然環境を守りながら、市民が林を身近に感じられるよう、昭和 28（1953）年 2 月、北海道は青葉公園を総合公園として都市計画決定をし、千歳町は、風致保安林であった通称「神社山」の土地 45 ヘクタールあまりの払い下げを受け、公園整備に取りかかりました。その後、球場、テニスコート、プールなどが、米軍基地要員の失業対策事業として整備され、開場しました。

昭和 40（1965）年頃の青葉公園では、春の恒例行事として「青葉まつり」がおこなわれ、新緑かおる公園で、バンド演奏、職場対抗芸能合戦、ポニーやウサギなどの小家畜牧場、宝探しなどの催し物が企画され、子どもから大人まで多くの市民で賑わいました。

昭和 47（1972）年には、運動、都市、自然、児童の各種公園の性格を備えた総合公園の整備が始まり、公園内の自然環境の保護や利用者の安全のために車を締め出し、自転車以外の車両を通行止めになりました。昭和 57（1982）年、市民のレクリエーションの拠点となる『市民の森』として「青葉公園基本設計」を策定し、平成 10（2008）年まで陸上競技場や催しができる広場、サッカー場などが整備され、現在では、図書館、テニスコート、陸上競技場、野球場など 17 の施設があり、自然観察やピクニックなどを楽しむことができる市内で最も広い約 102 ヘクタール（札幌ドーム約 18 個分）の総合公園となりました。千歳で生まれ育った人々は親しみをこめて「神社山」と呼んできました。校歌の歌詞として取り上げている小学校もあります。

このように、青葉公園は、人がまもり、必要な部分は手を入れ、ととのえてきた景観であると言えます。



③ 千歳神社

【景観づくりの手法「まもる」】

千歳神社の歴史は、北海道神宮より古く、江戸時代の万治元（1658）年にサケ漁の安全など水に関する願いをこめて、弁財天として建てられたのがはじまりです。享和3（1803）年には、現在の千歳神社の前身である思古津稻荷大明神がまつられ、文化2（1805）年に弁天社が建立されました。

その後、明治時代の神仏分離などを経て、大正6（1917）年に社名を稻荷神社から現在の千歳神社と改めました。現在の社殿は、昭和50（1975）年頃に造営されたものです。

毎年、その年の恵みに感謝をこめて、神輿や神楽を奉納する秋祭りが行われています。

学校や住宅などの都市の中に、自然に囲まれた神社がある景観は、昔から人がまもり続けてきたことにより生まれた、まちなみの景観です。



【豆知識】

◇アイヌ民族の伝説「ろうさん」

裏参道（女坂）を上ったところに「ろうさん」の碑があります。

ろうさんとは、『この場所から川や海に抜けていく道』という意味のアイヌ語の地名です。



【豆知識】

◇フレトヒのチャシ趾

千歳神社の石段中腹には、「フレトヒのチャシ趾」の碑があります。

山が崩れた場所はフレトヒと名付けられ、アイヌの人々がチャシ（砦）とした跡があります。フレトヒには、「昔、千歳川の大洪水により神社一帯の山が崩れ、その崩れた山が千歳川を経て日本海に流れて利尻島になった。」という伝説が残されています。

（昭和 54（1979）年6月建立）



【豆知識】

◇千歳神社の^{こまいぬ}狛犬

千歳神社には、狛犬はいません。いるのは^{こま}狛狐です。千歳神社の前身が「思古津稻荷大明神」で稻荷神社だったためと考えられます。

母狐の前足の間に一匹子狐がいます。背中にも一匹しがみついています。社殿から少し離れたところに山神社がありますが、そこには^{やまがみしゃ}狛犬がいます。また、神社に向かう階段の脇には、道祖神が祀られています。



【豆知識】

◇幸井の^{さい}水

千歳神社の境内から「幸井の水」と呼ばれる御神水が湧き出ています。この水は、11年連続水質日本一と評価される支笏湖から流れ込む超軟水の伏流水で、近年、幸福をもたらす井戸水としてたくさんの方がこの水を汲みに来ています。



千歳神社境内「神社山」の碑



神社山の野鳥の看板

④ 千歳川会所跡の碑

江戸時代、松前藩では藩士たちにアイヌの人々と交易をする独占的な権利を与えました。やがて藩士たちは、この権利を商人にあずけ、運上金（税金）を納めさせました。権利の及ぶ範囲を「場所」といい、交易所として「運上屋」と呼ばれる建物ができました。

寛政11（1799）年、幕府は蝦夷地を直轄支配し、運上屋を「会所」と改名しました。千歳では売場会所と買場会所が立ち、蝦夷地で初めて鉄銭が使われました。文化元（1804）年に一つにまとめられ「千歳川会所」となりました。

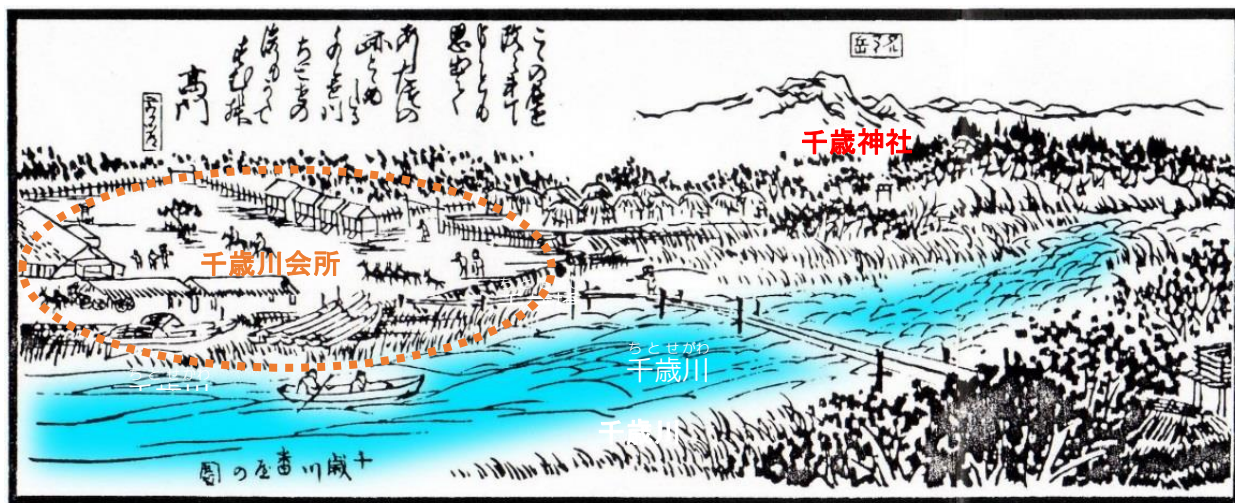
安政4（1857）年に松浦武四郎は、千歳を訪れた際に千歳川会所の賑やかなようすを絵に描いています。

江戸時代の本町地域は、松浦武四郎が描いた千歳川番屋の図のように、千歳川、千歳橋、千歳神社があり、札幌や苫小牧を結ぶ川交通の大切な場所で、品物の売り買いをする千歳川会所や蔵などの建物が建っていました。また、千歳川からたくさんのサケを運ぶ馬や丸木船があり、まちのなかで1番賑わっていました。

現在では、当時の面影や水運はなくなりましたが、川の広々とした印象は変わりません。



千歳川会所跡（ホテルかめや前）



〔千歳川番屋の図（安政4（1857）年）・松浦武四郎 作〕

⑤ 社 橋

普段私たちが駐車している場所は、実は橋になっています。この橋は昭和48（1973）年につくられました。



⑥ 新ママチ川と千歳川の合流

【景観づくりの手法「つくる」】

ママチ川は、支笏湖周辺を源に、千歳市南部を流れ、千歳川に合流する長さ約 22 キロメートルの川です。

昔のママチ川は曲がりくねり、水量が多く、大きな魚も住んでいた川でした。昭和 26（1951）年頃に、ママチ川周辺の森林が切り倒されると洪水が起こるようになり、その洪水を防ぐため、川の流れを変えて新しい川をつくりました（昭和 47（1972）年～昭和 49（1974）年）。

現在、この新しい川は「新ママチ川」と呼ばれ、市街地に入る前に千歳川に合流しています。

千歳川は、千歳市を代表する川で、支笏湖周辺の山々から流れ出て、千歳市街地を通り、石狩川に合流する長さ約 108 キロメートルの川です。

昔は、支笏湖周辺から切り出した木材を川の流れを使い、江別や札幌へ運んでいました。現在は、カヌーや釣りなどで市民に親しまれる川になっています。

合流部を主とした景観は、河川の整備で人がつくりだした水とみどりの景観です。



⑦ 無電柱化事業 にしきちょう 錦町と一般国道 36 号

【景観づくりの手法「ととのえる」・「とりのぞく」「つくる」・「ととのえる」】

北海道開発局は、平成 16（2004）年から平成 20（2008）年に、千歳駅前通りと国道 36 号（錦町 1 丁目から 4 丁目）の電気や電話などの電線と電柱をまとめて地下に埋める無電柱化事業を実施しました。電柱をなくすことで、地震などの災害に強く、景観も良くなりました。

錦町の地名は、昭和 17（1942）年につけられました。この地域は、第 2 次世界大戦以前から、室蘭街道（札幌から室蘭までの道路。現在の国道 36 号）に沿って住宅や店がたくさん並び、本町（現在のホテルグランテラス千歳付近）から続く市街地がつくられていました。

国道 36 号のデザイン灯の色は、景観に配慮し、こげ茶色になっています。

錦町を通る国道 36 号の千歳―札幌間は、駐留米軍が昭和 25（1950）年に始まった朝鮮戦争への対応のため、軍事的輸送拠点として千歳飛行場と札幌、小樽間を結ぶ道路として整備され、道内の郊外の道路としては初めてアスファルト舗装が採用されました。

昭和 27（1952）年 10 月の工事開始からわずか 1 年あまりで完成し、「驚異的な速さで完成した」、「軍隊の弾薬を運んだ」、「弾丸のような速さを出せる道路」などから弾丸道路と呼ばれるようになりました。



現在の国道 36 号



整備当時の弾丸道路

⑧ 無電柱化事業 千歳駅前通り（一般国道 337 号）

【景観づくりの手法「まもる」・「つくる」・「ととのえる」・「おおう」・「とりのぞく」】

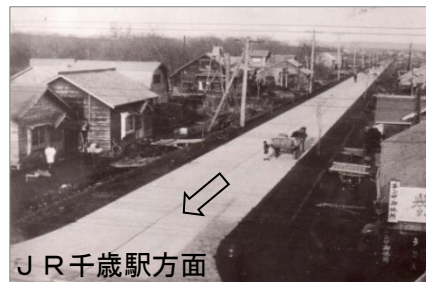
千歳駅前通り周辺は、建物の高さが高い建物（ホテルやマンション）と低い建物（銀行や店舗）によりまちなみがつくりられています。このまちなみは、千歳市のまちの中心としての役割と、北海道の空の玄関である新千歳空港や支笏洞爺国立公園の観光客を迎える場所や住む場所としての役割を担っています。



千歳駅前通りの無電柱化事業

今や銀行、オフィス、業務ビルと各種商業施設が連なるまちなみがある駅前通り周辺は、戦後間もない頃までは、旅館、商店、貸間、下宿などが点在する程度で、米軍の駐屯地に近い本町、朝日町、東雲町方面が繁華街を形成していました。

千歳駅前通りの千歳駅から海軍航空隊（現在の航空自衛隊千歳基地）までの区間は、北海道内で2番目に古く舗装され、丈夫で高価なコンクリート舗装になったため、重い荷物などを運ぶことができるようになりました。今から約80年前の昭和16（1941）年のことです。



昭和16（1941）年の千歳駅前通り

この地域では、昭和20年代から30年代かけて人口が増加し、それに伴って商業施設も増えていきました。昭和58（1983）年には、商業者を主体に「千歳駅前通り振興会」が設立され、平成元（1989）年から「駅通りはマチの顔」として街路灯の建て替え、歩道のカラーブロック舗装を、平成5（1994）年からイルミネーション点灯事業を展開しました。また、景観向上のために千歳駅前通りの電線地中化へ向けて国や市に働きかけ、平成16（2004）年から整備を実現しました。

千歳駅前通りは、道路の整備や電柱の地中化など、景観づくりに関する多くの手法を取り入れ、昔から今にかけて、人がつくってきたまちなみの景観です。

〈千歳駅前通りの移りかわり〉



昭和30年代中期



平成20（2008）年
電線類の地中化工事完了後・歩道橋撤去前



現在 令和元（2019）年

⑨ 歩道の路面標示／マンホール^{ふた}蓋

【景観づくりの手法「ととのえる」】

千歳駅前通りの歩道は、全ての人が安全に歩くことができるよう、歩行帯と自転車帯に分かれ、視覚障害者誘導用ブロック（点字ブロック）が設置され、高齢者や障がい者にやさしい歩道となっています。この歩道は、マンホールのデザインも含めて、歩行者の足元からデザインされているのが特徴で、マンホールデザインふたは、平成3（1991）年に千歳市下水道事業 30 周年を記念につくられました。デザインは、支笏湖にのぼるサケ、飛行機など千歳らしさがイメージされています。



⑩ 仲の橋通

【景観づくりの手法「そだてる」・「ととのえる」】

仲の橋通は、昭和 38（1963）年に千歳駅前通りとの交差点から千歳市役所の交差点まで舗装工事が行われました。それ以前の道路は、砂利でできていたため晴れた日には砂ぼこりがたち、雨が降るとぬかる道路でした。

仲の橋通では、商店街の方々が、花を植えたプランターを設置したり、清掃活動を行うなど、より良い景観にするために活動しています。仲の橋通の景観は、人がそだててきた景観であり、また、ととのえる活動を続けている景観です。

〈仲の橋通の移りかわり〉



〔豆知識〕

◇千代田町・用水路

千代田町の地名は、昭和 17 (1942) 年に「千代田」とつけられました。

「千代田」とは水田のある地域の名前で、この場所も昭和のはじめまでは水田でした。この水田に水を引くための用水路がたくさんあり、写真のように1つには①グリーンベルト西側、もう1つの用水路は②日本生命ビルの横の流れ千歳川に注いでいました。

①グリーンベルト西側



②日本生命ビルの横



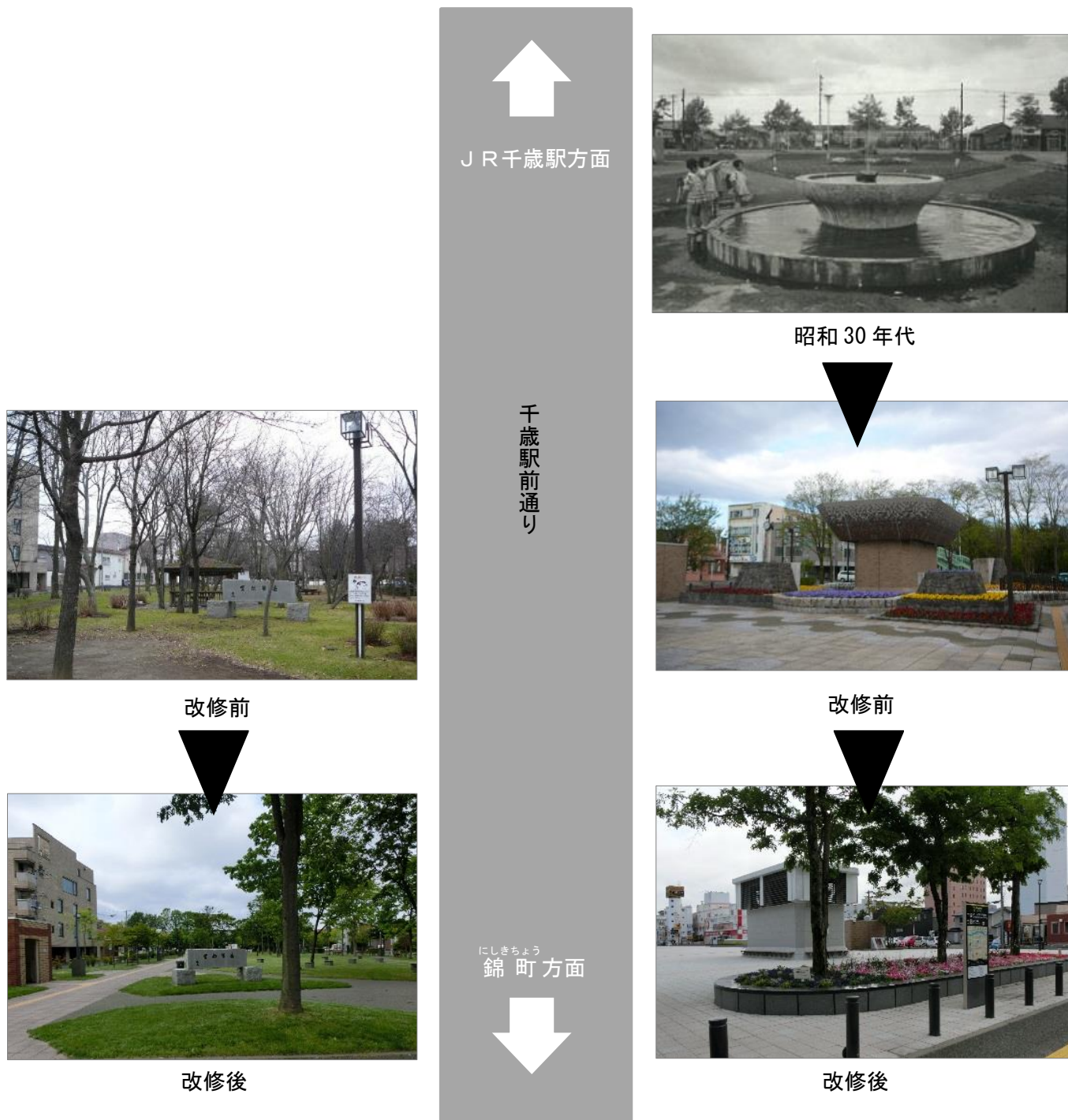
⑪ グリーンベルト

【景観づくりの手法「つくる」・「ととのえる」】

グリーンベルトは、昭和 17（1942）年から約8年間かけて、大規模火災を防ぐ「防火帯」としてつくられたのがはじまりです。

昔から広場として親しまれてきましたが、今では、遊具やベンチを置いたり、川と親しむ場所がつくられたり、公園のような広場へと生まれかわりました。

〈グリーンベルトの移りかわり〉



⑫ 看板（屋外広告物）

【景観づくりの手法「ととのえる」・「とりのぞく」】

私たちがいつも何気なく目にしている看板は、「屋外広告物」と呼ばれ、事務所や店舗ごとにいろいろなデザインのものがあります。

千歳駅前通りにもいろいろな看板が設置されていますが、周辺の景観になじんでいるものもあれば、目立っているものもあります。

これらの看板は、まちなみの景観をつくっているさまざまなものの中でも影響がおおきいものです。

北海道では、周辺の景観を壊さないよう、「屋外広告物条例」をつくり、看板の高さや大きさのルールを決めています。

この北海道で決めたルールがあることにより、高すぎる看板や大きすぎる看板は設置できないため、まちなみの景観を良いものにする手助けとなっています。

千歳市では、まちなみの景観を良いものとするために、「ちとせ都市景観ガイドライン」をつくり、看板の色や大きさを統一し、乱雑な印象にならないよう、配慮を促しています。

千歳駅前通りの広告物などは、地域住民や店舗、企業などの協力や、屋外広告物条例、ちとせ都市景観ガイドラインにより、つくり、ととのえられています。



中央大通



千歳駅前通



○「屋外広告物条例」の規制内容

＜地上広告物＞

- ・1面の面積：75㎡以下
- ・表示面積：150㎡以下
- ・高さ：20m以下

＜屋上広告物＞

- ・表示面積：300㎡以下
- ・高さ：地上から20mを超える場合は、建物の高さの2/3、又は、屋上取付面から20mのうち、小さい数値以下。

⑬ JR千歳線とJR千歳駅

【景観づくりの手法「つくる」・「ととのえる」】

〔JR千歳線〕

JR千歳線は、札幌市のJR白石駅と苫小牧市の沼ノ端駅を結び、南千歳駅・新千歳空港駅間の支線を合わせた延長59.2キロメートルの鉄道路線です。

大正15（1926）年8月に、苗穂（現在の札幌市）―沼ノ端（現在の苫小牧市）を結び、私鉄の北海道鉄道札幌線として開業しました。当時は、1日5往復運行され、蒸気機関車で千歳―苗穂間は1時間半かかりました。その頃の千歳村の人口は5千人あまりで、隣の恵庭村は人口6千人を超え、駅は2駅設置されていました。

千歳線では、昭和9（1934）年にガソリンカーを導入し、道内で初めて旅客輸送を無煙化しました。第2次世界大戦中の昭和18（1943）年に国に買収され、名称が国鉄千歳線に変更されました。

昭和36（1961）年頃から、函館―札幌間のルートは倶知安・小樽経由より距離が短く、カーブが少ないため、千歳線が主に使われるようになり、それ以来、道都札幌と本州、空港、道東を結ぶ大動脈としての役割を果たしています。

昭和55（1980）年には、千歳市の市街地で、鉄道高架工事が実施され、踏切がなくなり、人や車の行き来が便利になりました。

平成29年度のJR千歳駅の1日平均乗車人員は、8,937人となり、道内8位で、毎年増加しています。道内JR駅の1日平均乗車人員は、1位札幌駅（99,436人）、2位新千歳空港駅（17,096人）、3位手稲駅（15,660人）となっています。

〔JR千歳駅〕

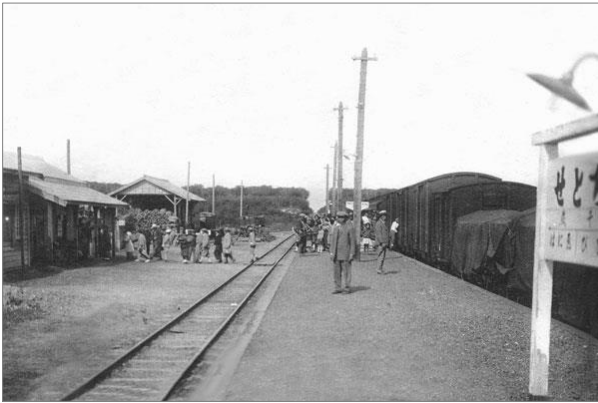
JR千歳駅の駅舎は、大正15（1926）年の千歳線開通時に完成した駅舎にはじまり、昭和17（1942）年頃には海軍の進出により改築されました。その後、昭和23（1948）年に2代駅舎が、昭和28（1953）年に3代駅舎が焼失し、昭和29（1954）年には^{こせんきょう}跨線橋を備えた4代駅舎が完成しました。

昭和55（1980）年に、千歳線の鉄道高架化によって5代駅舎が完成し、平成10（1998）年には駅構内にエスカレーターやエレベーターが設置されました。

平成16（2004）年4月には、バスの発着を千歳駅に集中させるバス路線網の再編と千歳駅周辺の交通ターミナル機能を柱とする千歳駅周辺整備事業により、市道栄通の拡幅やバス専用道路、高架下の駐車場、駅西口ビルと駅舎を2階で結ぶ連絡歩道などの整備が進められ、バスターミナル機能を持つ大型商業施設ペウレ千歳（現在の千歳ステーションプラザ）の商業棟が完成しました。

JR千歳駅の高架や西口ビル、駅前広場などを含めた周辺景観は、千歳市の発展とともに、人がつくり、ととのえてきたことにより生まれた、千歳市を代表する拠点の景観です。

〈JR千歳駅の移りかわり〉



昭和のはじめごろの駅ホーム



昭和 20 年ごろの駅舎



昭和 55（1980）年に完成した現在の駅舎



昭和 40 年ごろの駅舎

〔JR千歳駅東口（末広地区）〕

千歳駅の東口にある末広地区は、千歳川の北岸にあり、小高い丘のふもとの水田地帯が扇子を広げた形に似ていることから末広と名付けられました。末広には「だんだん栄えること」の意味があります。

JR千歳駅西口周辺とJR千歳駅東口周辺は、鉄道を挟んで商業地と住宅地という、異なった特徴を持つ景観となっています。これは、かつては鉄道が高架化されていなく、分断されていたため、西口周辺と東口周辺が一体として発展せず、それぞれ商業地、住宅地として発展していったからです。

普段見なれた景色でも、歴史や空間の特徴を知ることによって、さまざまな景観があることを発見することができます。

まち歩きで知る！ ちとせの景観

～自然と人が育む支笏湖編～



ちとせの景観 ～自然と人が育む支笏湖～

【ポイント解説】

① 柱状節理

【景観づくりの手法「まもる」】

モラップ近くの岸辺から湖底にかけては、四角い柱が並んでいるような柱状節理^{※5 ちゅうじょうせつり}の地形がみられます。支笏湖畔から乗船する水中観光船は、船底から湖の中の柱状節理を見ることができます。

支笏湖周辺は、活火山が連なる山岳地帯で、オコタンペ湖や美笛の滝、苔の洞門など、四季折々に変化する豊かな自然に恵まれています。春の新緑に始まり、ヒメマス（チップ）釣り、キャンプ、登山、サイクリング、紅葉で彩られる原生林、冬は白鳥の訪れと多彩な季節の移り変わりがあります。

支笏湖と周辺の自然や動植物、歴史は、支笏湖ビジターセンターで学ぶことができます。センターでは支笏湖に生息する鳥のさえずりを聞く設備や実物大の「苔の洞門」の写真パネルの展示のほか画像や模型などを用いて支笏湖の魅力をわかりやすく紹介しています。

【解説】

※5 柱状節理^{ちゅうじょうせつり}：火砕流堆積物が冷え固まるときにできた割れ目（節理）が熱の逃げる縦方向に伝わり、柱のような形になったものです。

② ウサクマイ遺跡（国指定史跡）

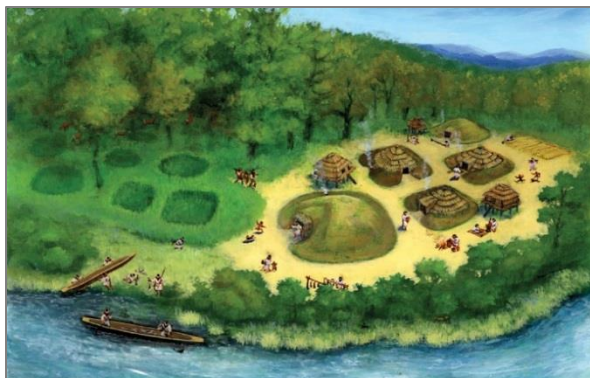
【景観づくりの手法「まもる」】

ウサクマイ（烏柵舞）は、アイヌ語で「オ・サ・クマ・ナイ（川尻・乾かす・柵・川の意味）」と言い、千歳川にサケが遡上し、秋にはあたり一帯でサケを乾かす光景が見られたと考えられます。

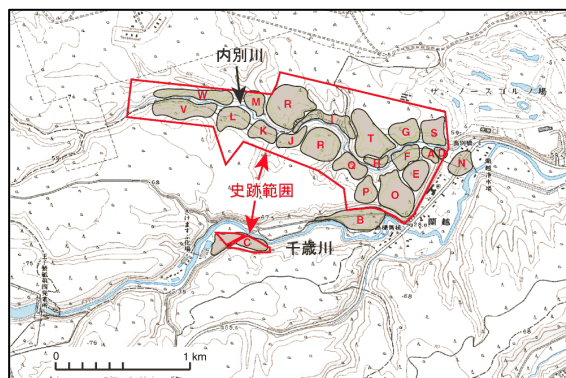
ウサクマイ遺跡は、千歳市の西方約5キロメートルの地点で千歳川と内別川に挟まれて、東西に長く伸びるウサクマイ台地と裾部の川岸に集中しており、合計 146 ヘクタールが史跡として保護されています。

昭和のはじめ、河野広道が初めてこの地の遺跡の存在を確認して以来、7次にわたり調査が行われ、この周辺に人が住み始めた約 7,000 年前の縄文時代早期から続縄文、擦文、アイヌ文化期から近代に至る 22 か所の遺跡と多数の近世の炭窯が発見されました。ウサクマイ A 遺跡では、28 の墓墳^{ぼこう}が発見され、多くの副葬品が出土しています。千歳川右岸のウサクマイ C 遺跡では、79 の竪穴住居跡が地表に明瞭なくぼみを見せて密集し、大規模な集落跡があります。ウサクマイ J 遺跡の一部には、落葉や落枝からなる泥炭層が形成されており、動・植物の遺体のほか縄文前期の土器が発見されています。

史跡として保護されることで、そこにしかないまもるべき重要な景観資源がまもられています。



1, 100～1, 300 年前(擦文時代)のようす (想像図)



ウサクマイ遺跡群



ウサクマイ C 遺跡見学コース入口



ウサクマイ C 遺跡、竪穴住居跡のくぼみ

ウサクマイ遺跡がある^{ないべつ}内別川周辺では、昭和 60 (1985) 年頃にゴルフ場の開発問題が起こり、千歳の飲み水として利用していた内別川の環境保全をまもる声上がり、「千歳市民の飲み水を守る連絡協議会」が設立されました。この市民団体が大きな役割を担っていましたが、都市の発展とともに水を取り巻く環境は悪化しさまざまな問題が発生し、水道法などの法律だけでは対応できないために千歳市では、千歳市環境基本条例及び千歳市自然環境保全条例を施行しました。その中で内別川流域を第 1 種自然環境保全地区として指定し、監視業務の強化や無秩序な開発の抑制、史跡以外の民有地の取得のほか、土地所有者への適正な土地利用を求めるなど、自然環境と水資源の保全を図っています。

このような水をまもる運動が結果的には、自然景観の保存につながっています。

【豆知識】

□貴重な出土品

ウサクマイ遺跡の出土品には、市指定有形文化財の「男性土偶」や「蕨手刀」などが発見されています。

◇「男性土偶」

男性土偶は板状の人形（土偶）です。縄文時代の土偶はほとんどが女性をモデルにしているので、男性とはっきりわかる例として全国的にも大変珍しいものです。全長 14.5 センチ、厚さ 0.9 センチ、縄文時代晩期に作られたと考えられています。



男性土偶

◇「蕨手刀」

蕨手刀は二振り鉄製の刀で、一振りは鞘^{さや}が残っています。柄部の形が山菜のワラビに似ていることから「蕨手刀」と呼ばれています。この種の刀は、1,300 年ほど前の東北地方の遺跡から多く発見されており、古代の北海道と東北の交流を示す大切な資料となっています。



蕨手刀

③ 千歳さけますの森 さけます情報館

【景観づくりの手法「そだてる」・「つくる」】

千歳川のサケ漁は、明治時代初めの乱獲^{らんかく}によりサケの遡上^{そじょう}が激減し、衰退の危機を迎えました。これに対応して開拓使は、明治 10（1877）年、千歳川のサケから魚卵^{ぎょらん}を取り出す人工ふ化を試みますが失敗し、明治 15（1882）年には千歳川を種川^{たねがわ}に指定してサケの捕獲を全面禁漁にしましたが遡上は増えず、人工ふ化事業は緊急の課題となりました。

その後、アメリカでサケ・マスのふ化技術を調査した伊藤一隆^{いとうかずたか}により、古くからサケの天然産卵場だった烏柵舞地区^{うさくまい}に、明治 21（1888）年に官営の千歳中央ふ化場が設置され、明治 29（1896）年には遡上するサケの親魚^{ほぎょしや}を水車ですくい揚げて捕獲する捕魚車（インディアン水車）が現在の千歳橋上流に導入され、千歳での親魚の捕獲と採卵の事業がはじまりました。千歳の発眼卵^{はつがんらん}は、全道各地の簡易ふ化場へ分配され、全道的なサケの人工ふ化放流事業へと発展しました。

捕魚車が設置されている景観は、人が「つくる」明治から変わらない景観となっています。

ふ化放流事業はもともと北海道庁の管轄でしたが、昭和 27（1952）年に国に移され、水産庁北海道さけ・ますふ化場を設置し、組織の改編を経て、現在は一般社団法人日本海さけ・ます増殖事業協会が親魚を捕獲し、独立行政法人水産総合研究センター北海道区水産研究所千歳さけます事業所がふ化・放流を行っています。毎年、約 3 千万尾の稚魚が放流され、千歳川は北海道日本海域におけるサケ・マス増殖事業の中心的な役割を担っています。こうした千歳川のサケ・マス人工ふ化事業の歴史は、千歳さけます事業所内の北海道区水産研究所展示施設である「千歳さけますの森 さけます情報館」で学ぶことができます。ふ化場内は、かつて多くの市民が親しんだ桜の名所で、多くの会社や家族などのグループがお花見を楽しんだ所であり、その後、ふ化場施設の拡張のため桜の木が伐採され、昭和 56（1981）年の花見が最後となりました。

サケの遡上が象徴するように人が守らなければ継続できない景観もあります。



明治 30 年頃

【豆知識】

◇鮭鱒人工孵化発祥記念碑

建立 昭和 19（1944）年 11 月 3 日

目的 鮭鱒人工孵化事業発祥地の記念

碑文 「北海道水産ノ大宗タル鮭鱒漁業ノ維持増産ハ夙ニ官民ノ協力セル所ニシテ明治十年開拓使ハ豊平川及び漁川ヨリ鱒卵ヲ採リ…」



◇北海道紅鱒養殖発祥之碑

建立 昭和 41（1966）年 9 月 16 日

目的 紅鱒養殖発祥地の記念

碑文 「北海道紅鱒養殖発祥之地」



④ 王子製紙株式会社 苫小牧工場 千歳第一発電所

【景観づくりの手法「まもる」・「つくる」・「ととのえる」】

千歳川には王子製紙苫小牧工場に所属する5か所の発電所があります。そのうち最も大きい第一発電所は明治43（1910）年9月、わが国における新聞用紙の不足を満たす目的で、王子製紙が苫小牧に工場を建設した際、その動力源として作られた発電所となっています。

支笏湖から流れ出た千歳川の水は、落ち口付近で調整され暗渠送水管により水だまりに誘導して第一発電所へ送られます。この取水ダム（堰堤）はコンクリート製重力式ダムですが、補強するためにバットレスと呼ばれる張り出しの翼が並んでいる珍しいタイプです。さらに堤の表面には、凍害防止のため張り石が施され、重厚で遺跡を感じさせる肌合いを出しています。

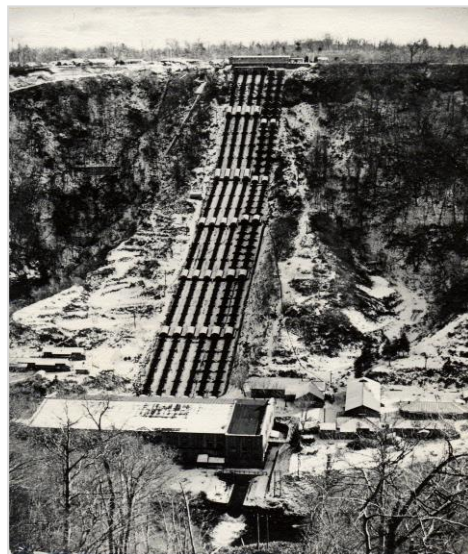
第一発電所は、現役の産業用発電所としては国内最古のもので、同年建設のレンガ造りの建物の中に明治43（1910）年～昭和44（1969）年製の発電設備があり、大正3（1914）年製の国産発電機は現在も常時稼働しています。

この5つの発電所は山線鉄橋などとともに、平成19（2007）年、経済産業省から「洋紙の国内需給を目指し、北海道へと展開した製紙業の歩みを語る近代化産業遺産群」として認定されました。また、千歳川の王子製紙水力発電所施設群は、同年に北海道における水力電力開発黎明期を代表する現役稼働の貴重な水力発電施設群として評価され「北海道選奨土木遺産」にも認定されています。

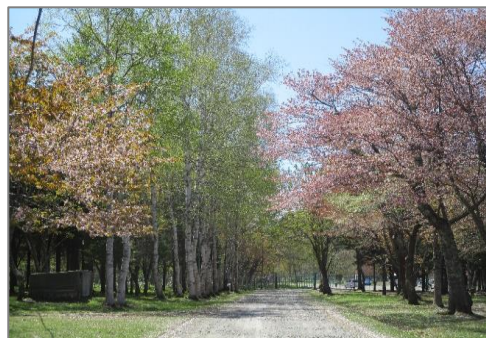
第一発電所周辺は、春は桜、秋は紅葉と、四季折々の風景があり、自然と人工物が美しい風景をつくり出しています。

その後、苫小牧工場の拡張に伴い下流に順次2、3、4、5の4発電所が新設され、支笏湖の水を天然の恩恵として最も有効に利用しています。

王子製紙は、この他に恵庭発電所・漁川発電所（漁川系）、尻別第1・2発電所（尻別川系）を有しています。支笏湖面の標高は約250メートルであり、5か所の発電所で195メートル余りの落差を有効に利用し電気を発生しています。千歳・恵庭・漁川・尻別発電所で発生した電気は6万6,000ボルトの電圧で苫小牧工場に送電され、日夜新聞用紙を造るための重要な原動力となっています。



昭和3年頃の千歳第1発電所全景



桜とシラカバ並木

各発電所への立入は禁止されていますが、第一発電所の敷地内の水圧管頭部に設けられた展望台が開放されており、建設当時のレンガ造りの建物と4本の水圧管が、130メートルの落差とともに見ることができます。

展望台正面に広がる台地は、4万年前の支笏火山大噴火の噴出物が厚く積もった火砕流台地で日本地質学会北海道支部による「北海道地質百選」の候補にもなっています。

水圧管は、緑の着色により、修景されており、ガイドラインの景観形成で基本となる「ととのえる」が実践されています。



【豆知識】

◇支笏湖温泉街は 60 ヘルツ

千歳発電所から供給されている電力の周波数は北海道電力の 50 ヘルツとは異なり西日本と同じ 60 ヘルツでした。発電所建設時にアメリカから投入された発電機が 60 ヘルツだったため、配電されている苫小牧工場と社宅、支笏湖温泉地区は、現在も 60 ヘルツとなっています。

【豆知識】

◇鈴木梅四郎翁^{おうしょうとく} 頌徳碑

鈴木梅四郎翁は王子製紙苫小牧工場の生みの親ともいえるべき人でした。翁は三井銀行神戸支店長から明治 35（1893）年王子製紙の専務に就任し、当時赤字経営打開の会社百年の計を図らんがため、北海道に一大工場を建設すべく自ら調査団を率いて北海道に渡り、胆振の山野を跋涉踏査し、苫小牧の地を大製紙工業建設の一大適地として選ばれ、工場創成期の建設に並々ならぬ辛酸を重ねていました。

（碑文）

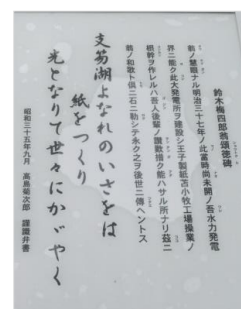
鈴木梅四郎翁頌徳碑

鈴木梅四郎翁ノ慧眼ナル明治三十七年末開ノ吾水力電気界ニ能ク此大
発電所ヲ建設シ王子製紙苫小牧工場操業ノ根幹ヲ作レルハ吾人後輩ノ
讃歎措ク能ハサル所ナリ茲ニ碑ヲ建テ永ク後世ニ伝ヘントス

支笏湖よなれの功は紙を造り光となりて世々に輝く

昭和三十五年九月

高島菊次郎 謹識并書



（資料協力 王子製紙株式会社苫小牧工場千歳発電所）

【豆知識】

◇水明郷

水明郷は、千歳市の中北部、千歳川の右岸の台地の一角にあります。集落は字の西寄りに立地しており、字の領域は東西に長く西は支笏湖畔近くまで、東は第4発電所付近までに及びます。

水明郷の地は、千歳川上流に設けられた発電所で働く人々が暮らした集落であったようです。

集落には、従業員の住居や小中学校のほかに診療所、商店、説教所などもありました。現在残っている建物は、厚生会館・重役の住宅・浴場・学校の体育館となっています。元々、学校は川沿い（第一発電所）の近くにあったものが、後年になり現在の地に移転したもの

であり、これらの建物は、企業によってつくられた歴史的な痕跡^{こんせき}となっています。入口からすぐの所には神社があり、水神・山神が共に祀られています。

集落跡には、いくつかの施設が残っているため、委託された管理者が常駐し通年で居住し、草刈りや除雪などの施設の管理をしています。厚生会館は住居として、浴場は木工室として使われています。

残された施設は、まもられた景観ではありますが、産業の変化や所有者の変化によって移り変わることもあります。

◇水明小中学校

大正元（1912）年に王子製紙第一発電所で働く従業員の子どもの教育の場として、千歳村立^{うさくまい}烏柵舞特別教授所が開校し、昭和 22（1947）年、烏柵舞国民学校から烏柵舞小学校となり、昭和 24（1949）年に千歳中学校烏柵舞分校が併置されました。

昭和 26（1951）年に字名改正により水明小学校と千歳中学校水明分校と改称され、昭和 39（1964）年、児童数の減少が続いたために支笏湖小学校に統合され水明小学校は閉校になりました。

昭和 41（1966）年、千歳中学校に統合されて水明中学校は閉校となりました。

⑤ 支笏湖ビジターセンター

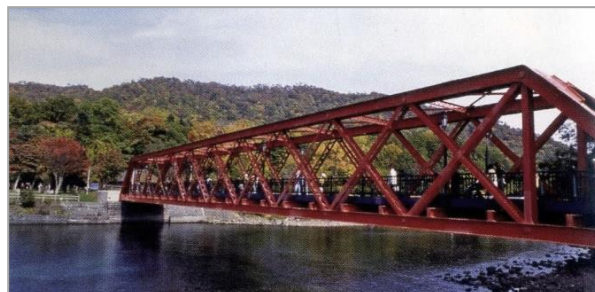
支笏湖の歴史や周辺の自然などについて楽しく学べる施設です。建物には支笏湖周辺を産地とする自然素材を使い、太陽光発電や地熱を利用した自然エネルギーを活用し環境配慮型の施設となっています。建物内の展示施設は、「森へ、山へ、湖へ もう一つの支笏湖の旅へ」をテーマに今もなお活動が続ける火山のようすや、支笏湖周辺に生息する生き物の生態、湖の中の世界など、模型や大型写真などにより支笏湖の自然を紹介しています。

⑥ やませんてっきょう 山線鉄橋

【景観づくりの手法「まもる」・「そだてる」】

支笏湖の水が千歳川に流れ落ちる「落ち口」に鮮やかな赤の塗装が印象的な鉄橋があります。「山線鉄橋」の名で親しまれるこの橋は、かつては王子製紙が資材運搬用に運行していたけいびん軽便鉄道の列車が走っていました。

この橋は、もともと明治32（1899）年にイギリスから輸入され、北海道官設鉄道上川線（現在のJR函館本線）の砂川―もせうし妹背牛間の空知川に架かる「第一空知川橋梁」そらちがわきょうりょうとして架けられていたものです。



当時の最先端技術でつくられましたが、輸送量の増大により架け替えられることになり、王子製紙に払い下げられ、支笏湖の現在の場所に移設されました。その後、軽便鉄道が廃止される昭和26（1951）年まで、支笏湖―苫小牧間の輸送を支えました。山線廃止後、鉄橋は支笏湖のシンボルとして地元はもとより観光客に親しまれていましたが、王子製紙では維持管理などに経費がかさむことから撤去を検討しました。一方、国立公園を管理する厚生省（現在の厚生労働省）と道は観光資源として役立つほか、モラップ地区への交通路になっていたため、存続と千歳市への寄付を働きかけた結果、王子製紙は昭和42（1967）年に千歳市へ寄付を決めました。

このようにして、湖と山線鉄橋のある景観はまもられています。

【豆知識】

◇道内最古の鋼橋こうきょう

山線鉄橋は、道内で現在使われている最古の鋼橋（イギリス型ピン結合トラス橋）で、日本橋梁史において希少かつ重要な資料として評されています。平成11（1999）年に千歳市指定有形文化財、平成19（2007）年には第一発電所とともに経済産業省の「近代化産業遺産群」に認定されました。また、平成31（2019）年4月には、「北海道選奨土木遺産」に認定されました。

【豆知識】

◇支笏湖への大切な交通手段だった王子軽便鉄道（山線）

王子軽便鉄道の正式な名前は、「王子製紙苫小牧専用鉄道」といい、通称で「山線」と呼ばれていました。「山線」の名は、苫小牧から日高方面の海沿いを走っていた鉄道を「浜線」と呼び、支笏湖方面を走っていた鉄道を「山線」と呼んでいたことに由来します。この鉄道は、王子製紙が苫小牧工場の操業に必要な電力を確保するため、千歳川に水力発電所を建設することになり、工事に必要な物資や人員、紙の原料となるパルプ材などを運搬するために敷設^{ふせつ}されました。はじめは二輪馬車で運搬していましたが、物資の増大により、明治 41（1908）年 4 月にトロッコを馬で引く馬鉄軌道^{ばてつぎどう}を敷設し、その年の 8 月には機関車による輸送を開始しました。

支笏湖が観光地として知られるようになり、乗車希望者が増加した大正 11（1922）年からは、一般客の乗車も許可されました。列車は、苫小牧―支笏湖間を所要時間 1 時間 45 分で運行し、1 日あたり夏期 7 往復、冬期 5 往復しました。資材運搬を目的に運行していたため、切符の裏には「人命の危険は保証せず」と書かれていたり、貨物が多いときには坂を登れず、乗客が下りて列車を押し下りたというエピソードもあります。また、皇室や政財界、軍部の要人なども乗せ、支笏湖観光の貴賓列車^{きひんれっしや}としても活躍しました。その後、昭和 25（1950）年に苫小牧―支笏湖間の自動車道が完成し、バスの運行やトラックでの輸送も可能となったため、山線は翌年 8 月に役割を終え、その歴史に幕を閉じました。現在、山線の跡地は千歳―支笏湖―苫小牧間のサイクリングロードに利用されています。

⑦ 支笏湖ヒメマスふ化場

【景観づくりの手法「まもる」・「そだてる」】

※市有地のために敷地内に入ることをご遠慮ください。

阿寒湖に生息していたヒメマス（カバチェップ）を支笏湖で増殖させる試験のため、支笏湖のシリセツナイ川^{かこう}河口に「支笏湖ふ化場」がつくられることになりました。

この川は冬でも枯渇^{こかつ}しないことからふ化養殖事業の適地としてこの地が選ばれました。

明治 27（1894）年、阿寒湖からヒメマスの卵を移植し、翌年の明治 29（1896）年に、ふ化稚魚の初放流が行われました（翌年にヒメマスの初回帰を確認）。明治 31（1898）年、支笏湖ふ化場が開設され、以降、道内、道外各地の湖沼にヒメマスの卵が分与されました。ヒメマスの放流のほかに、千歳川にあるふ化場でふ化したサケ・マス類の放流が行われ水産資源確保のための試験が盛んに行われました。当時、支笏湖には、アメマスとハナカジカの 2 種類しか生息が確認されていませんでした。

平成 21（2009）年にはヒメマスのふ化事業が千歳市から支笏湖漁港協同組合に委託され、遊漁管理とヒメマス重の保護養殖を担っています。

明治 27（1894）年以降現在までの約 120 年間いくつかの苦難を乗り越え、増殖と保護に力を入れてきました。ヒメマスは千歳市の重要な観光水産資源となっています。

明治 27（1894）年の建物は、看守のための小屋で広さ間口二間・奥行き二間半の木造平屋建て、ふ化場は間口三間・奥行き五間の簡素なものでした。その後、明治 41（1908）年と昭和 3（1928）年に建替えられました。その後 86 年間にわたり大切に使われてきましたが、老朽化が激しいことから解体され、平成 26（2014）年に現在の新しい建物が支笏湖の景観になじむようにつくられました。



昭和 3（1928）年に建てられたふ化場



現在のふ化場

⑧ 王子製紙株式会社 苫小牧工場 倶楽部別邸

【景観づくりの手法「まもる」・「ととのえる」】

※民有地のために敷地内に入ることとはご遠慮ください。

支笏湖温泉地区にある王子製紙株式会社苫小牧工場倶楽部別邸は、大正 5（1916）年、かんいんのみやことひとしんのう閑院宮載仁親王が来道する際の御泊所として大正当時では北海道一と言われた総檜造りの豪華な建物が現在の集団施設地区湖側の中央広場に建設されました。湖畔では昭和 27（1952）年に国立公園支笏湖の集団施設地区が計画され、その結果、別邸は商店街に隣接となり静けさを保ちづらくなり、昭和 35（1960）年に現在の高台に移築され、離れ座敷を増築し、道産のトドマツ、アカマツの板壁で山荘風の優美な建物となっています。イタヤカエデ、クリ、ナラの林に囲まれて、現在も湖畔の自然に溶け込みながら営業しています。

昭和 36（1961）年 8 月には、昭和天皇が全国植樹祭御臨席時に宿泊され、人工物と自然がつくりあげた美しい景観を表すように別邸を次のように詠まれました。

御製 湖をわたりくる風はさむけれどかへでの若葉うつくしき宿



⑨ 支笏湖温泉の住宅地

【景観づくりの手法「まもる」・「ととのえる」・「おおう」】

支笏湖畔は、ヒメマスふ化場で働く人たちが住み始めたのがはじまりと言われています。厚生省（現在の厚生労働省）は、昭和 24（1949）年に支笏洞爺国立公園の指定を行ったものの、支笏湖地区のほとんどが林野庁の所轄地でした。

当時の様子は、屋台のアイスクリームや売店、食堂や土産品などの簡易的な建物が 7～8 件あり、人口は 100 人程度のまちでした。

その後、昭和 27（1952）年に林野庁から厚生省への湖畔の「集団施設地区」の所管替えが行われ、バスの発着場や駐車場などの公共施設、ホテルやユースホステルなどの宿泊施設、湖岸や河岸の商店の移設が進むなどの便益施設と地域住民の居住施設などを、一定の地割りに基づいて計画的に整備し、現在のような温泉街となっています。

平成 8（1996）年 3 月に公園計画が改訂され、支笏湖一帯の公園管理の現況について「風致景観の維持を図るため、公園指定以来、関係機関の協力のもとに高さ、デザイン、材料、色などに配慮した建設作りが進められてきており、国立公園の一つのモデル地域となっている。」として、国立公園指定以来続く基本方針を維持していくことを強調しています。

特にホテルなどの建築物については「勾配こうばい屋根、高さ 13 メートル以下、屋根および外壁の彩色は屋根が赤褐色またはこげ茶系、外壁は白、灰色系などの中間色」と明記しています。

平成 18（2006）年には、環境省をはじめとする 13 機関と団体は、深刻化する水上オートバイやプレジャーボート（小型船舶）に対して、乗り入れを規制し水質の悪化をはじめ水生植物の荒廃、騒音、ごみなどの対策に取組みました。

平成 22（2010）年には、火山景観の維持と生物多様性の確保、自然景観と温泉を楽しむる保養地、地域に応じた適正な利用による快適な利用環境の確立、環境に配慮した公園利用の推進など、支笏湖地区の国立公園指定当初からの方針通り開発行為による改変の抑制を第一に掲げ、環境学習の場、環境配慮型施設の導入とリピート型・滞在型観光の施策への導入など多様な主体との連携などを掲げています。

このようにさまざまな規制により支笏湖地区の自然景観を人がまもり続けています。



⑩ 支笏湖ユースホステル

【景観づくりの手法「まもる」】

※民有地のために敷地内に入ることをご遠慮ください。

支笏湖を見下ろす木立^{こたち}の中に、北欧の山荘をイメージさせるような赤い三角屋根の支笏湖ユースホステル旧館があり、支笏湖のシンボリックな存在でした。

支笏湖ユースホステルは、昭和 30（1955）年、支笏湖小学校の旧校舎を改修して、日本ユースホステル協会初の専属施設として開業し、5 年後の昭和 35（1960）年 7 月、全面改築し現在の旧館「赤い三角屋根」が国内の直営ユースホステル第一号として竣工しました。北方建築の第一人者の田上義也^{たのうえよしや}氏が設計した急勾配^{きゅうこうはい}の屋根は、確立した「雪国型造型」^{※6}が意識されています。

建物と自然が調和する景観をどのように「つくる」、「まもる」、「そだてる」かを、話し合い共通認識を作っていくことが大切です。

【解説】

※6 「雪国型造型」：南面を大きく開口し、垂直性を強調する南面から北側に大きく屋根を吹き下ろす形態です。単純に形態だけでなく、敷地の正しい認識と生活を生き生きと表現する建築であること、造型とは美と技術の両面から達成されるべきと唱えています。

【豆知識】

◇田上義也

田上義也は、大正から昭和にかけて北海道を拠点に活躍し、近代建築の三大巨匠のフランク・ロイド・ライトの影響を受け、北海道の気候風土に根ざした洋風建築を数多く残されています。また、札幌新交響楽団の創立者でもあり、初代指揮者も兼務しました。作品には、札幌市教育文化会館や北海道立旭川美術館などがあります。